飛水

高樹のぶ子

講談社文庫

講談社文庫

常州大学図書館
藏書章

飛水

高樹のぶ子

講談社

|著者| 髙樹のぶ子　1946年山口県生まれ。'84年「光抱く友よ」で芥川賞、'95年『水脈』で女流文学賞、'99年『透光の樹』で谷崎潤一郎賞、2006年『ＨＯＫＫＡＩ』で芸術選奨文部科学大臣賞、'10年「トモスイ」で川端康成文学賞をそれぞれ受賞。'09年には紫綬褒章を受章した。近著に『甘苦上海』『アジアに浸る』『マルセル』などがある。

飛水（ひすい）
髙樹のぶ子（たかぎ こ）
© Nobuko Takagi 2013

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2013年10月16日第１刷発行

発行者――鈴木　哲
発行所――株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン―菊地信義
本文データ制作―講談社デジタル製作部
印刷――豊国印刷株式会社
製本――株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277678-3

目次

飛水

解説　清水良典

講談社文庫

飛水

高樹のぶ子

講談社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

飛水

解説　清水良典

飛水 HISUI

美濃太田駅を離れたあたりから、雲行きが妖しくなった。夕照(ゆうで)りする空から落ちてくるのは粉のような薄紫の煙霧、それとて真っ直ぐにではなく、列車の窓に入り込みそうに、時には横向きに流れ来るのだけれど、つむじのようにも渦を巻いて、つむじのままにまたどこかへ去る。

高山本線を行きつ戻りつ、何度往復したことだろう、このようにただ外の景色を眺めながら。

窓は開かない。昔は両手で窓枠の端の器具を摘んで引き上げることも出来たのに、その瞬間外の風が霧となって入り込んで来たのに、今は車内と外界は遮断されてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

て、こちらに来たがる煙霧は途方にくれ、丈の伸びた稲や杉や蔦葛（つたかずら）に絡みついたまま、後方へと流れ去る。

山肌を這い登る樹木が、車窓にも迫ってきたかと思えばたちまち民家の幾つかが遠のき、空の色はさらに濃くなる。硝子窓を斜線で切りながら雨がやってきた。

いよいよ来た。

斜め前の席に背を向けて座る中年の男女が、台風の話をしている。夫婦のようだ。

「台風、行き過ぎたときが雨のピークだって、テレビで言ってたわよ」

「来れば濡れるだけのこと、予報なんて当てにはならん」

「情報は信じなくっちゃ、ウエザーフォーキャスト、そう言うの、英語覚えたばかり」

「ゲリラで来るから、来たら濡れるしかないよ。ゲリラから逃げ出せるわけないんだから。ゲリラだから、どこに来るかもわからんしな」

「逃げ出せるわよ、人間は逃げながら生きているんだもの。わたしは逃げるわ」

人間は、という固い一言に、夫らしい男はむっとした様子で黙った。女が、人間は、と言ったとたん、男は会話から逃げ出す、妻はそれを、自分が正しいことを言ったからだと思ったに違いない。

妻がなにかの折りにまとめ口調になるのが、男は嫌いなのだ。

夫婦の後ろ姿に向かってふふと笑うと、夫らしき男が気配で振り向いて、何も見なかったように前を向き直した。

年格好は五十代かしら。

二人は下呂駅で降りた。

ゲリラ雨とやらはまだ来ていなくて、来そうな気配さえなくて、けれど天の仕事を淡々とこなすように、雨滴が落ちてきていた。

いつの間に上麻生駅や白川口駅を通り過ぎていたのか。トンネルの中であってもあ今そこを通過したと意識するはずなのに、夫婦のおかげで気付かず行き過ぎた。

二人の姿が消えてみれば、あれはこのあたりの地霊様であったに違いないと思えた。何かを伝えたくてやって来た男女神であれば、ゲリラとか逃げ出すの言葉が、とりわけ意味深い。

下呂の駅を過ぎてすぐのところ、線路脇の柵の周りに、桔梗が群生しているのを見つけた。

群れるとこの花、美しさが半減する。秋の七草でいう朝貌はこの花のことだと教えてくれたのは高橋芳康、芳ちゃんだった。

桔梗、風情からして間違いなく女でしょう、それもはかなげでありながらどこか孤独を潔しとする気丈な強さをあらわす花、秋の七草に入れられているなら食べることだって出来るのでしょうし、ああ、所詮食べられてしまう花なのね。

拗ねると芳ちゃんは、そうですそうです、食べると多分美味いんだ、と食べたこともないくせに胸はって、知ったようなふりで言い返した、あれも同じ雨の季節。

ひょろりと長い茎には、緑色の幼魚のような細い葉が、煩くない程度についついと伸びていて、その茎の先端のあちこちに、全開したとしても花弁を散らすことのない、筒状の淡い紫色の花が、中心から濃い紫の糸筋を走らせて、ぽってりとついている。花の紫というのはそれだけで気品があり、孤独でもある、そして男に好かれる、だから群れてはならない。それなのにたったいま見たのは、群れていましたよね、と意地悪く目で追うが、窓の外は雨一色に白く濡れていて、そろそろゲリラ襲来かしら。

桔梗についてはあまた在って、ともかく在りすぎて、記憶が紫色に染まるほどだ。

芳ちゃんと急速に近付いて、いざいざという夜、飛騨高山からこっそり出掛けた飛騨古川の宿の花生けに、一輪挿してあったのがまず一つ目。宿の名前が桔梗館なので、この一輪は当然と言えば当然。

すでに妻帯者と人妻になっていた身で、それもお互いに家計と月々の小遣いをやりくりしての逢瀬だったということもあるが、百五十年も続いた老舗旅館の旧館、よほど旧いもの好きのお客以外には好まれない部屋は、手頃な値段で有り難かった。

その昔、飛騨古川あたりが養蚕業で栄えていたころ、製絲工場へ奉公する女工たちや、彼女たちを束ねる検番の宿泊で賑わった宿だったらしい。新館は今風に建てられているけれど旧館はわずかに手を加えられただけで大きくは変わらぬまま置かれていて、設えとしての床などは無いまま、簡素な六畳間の片隅に、置き床ひとつが在る部屋の一輪挿しに、桔梗がついと挿してあった。

侘びしさより風情が勝り、花は眼中に無かったというより他のことで気が焦っていて、部屋に入るやいなや畳に押しつけられた背中と腰の固い感触、ちょっと待ってよと言うと、芳ちゃん慌てて離れて、桔梗は秋だよな、と置き床に目を逸らした。

あれは夏前だったから、桔梗の花期は長いのですね。

秋と言う言葉は逢瀬には無粋、なのに芳ちゃん、教養がないから平気で口にした。

とはいえ、それやこれや、あとで思い出したのであって、あの夜は芳ちゃんもただ必死で、赤い顔の上にぶっきらぼうを仮面のように乗せて、お風呂に行ってくると立ち上がったのであった。

ズボンを脱いで浴衣に着替えるとき、ほらとばかりにわたしの方を向いた、あの野蛮で子供じみた滑稽さ。参ってしまったわたしも、とりあえず花に逃げるしか無かった、花も迷惑なはなし。

必死だが馬鹿馬鹿しくて、おまけにどこかに罅(ひび)が入るととめどなく割れて行く人だと、これもあとで、思い当たることが沢山出てきた。

桔梗その二つ目。飛騨古川から随分の年月が経っていて、その年月は人生の大きな塊のようでもあり、薄紙で隔てただけの近さのようでもあり、どうかした弾みに、数十年を越えて簡単に行き来できる時間だとも思えるのだが、あれは夏の初めだったか、雪のとけた白川郷を通って富山まで出て、ついでに立山まで足をのばしてみようかということになった。ところが五歳になる息子が小用をもよおしたので、国道359号線から空地のありそうな道路へと入りこんだ。

長く高山に住んでいて、結婚相手も地元の公務員だった。曲ってみればそこは国道41号線で、こんな所にまで41号線が来ているのだと、急に胸が急(せ)くように堪らなくなった。

41号線は高山を通過して富山まで伸びている、という当たり前のことが耐え難くなったというのは、明るみの中に潜む闇に不意打ちをくらったのに似ている。高山市内

を抜ける41号線とはまた別の、美濃の飛水から何十年もかけて、わたしを追いかけてきた41号線だった。

41の数字の上を、桔梗の紫が流れた。ぐらりと視界が揺れた。

桔梗の季節では無かったのに、いくつもの花が激しく震えて、子供の小用のことを一瞬忘れてしまった。夫は素早く草地を見つけて車を停めたので、子供と走って事なきを得た。

だから車に乗る前に、トイレに行こうと言ったのにと、上の空で小言を言った。

車の中で子供に、おかあさん顔が黒い、と怯えた目で言われ、鏡を覗くと、確かに死人のように頬が窪んで蒼かった。

桔梗の記憶には三番目も四番目もあるが、今更、どこでの事だか思い出せない。下呂の駅近くの桔梗は、その百番目か千番目なのだろう。

飛騨古川に着いた。

数えきれないほど来たので、目隠ししてでも桔梗館まで行ける。

あの夜、一輪の桔梗が挿してあった六畳の部屋は、後年、窓側の床の一部に飛騨杉が張り直されたりしたが、梁や天井の桟、障子などの建具は昔のままだ。梁は長年の煤を集めて黒光りしている。客用というより保存のための改装が行われてからも、す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com